

駒澤大学仏教文学研究所規程

(名称・設置)

第一条 駒澤大学に駒澤大学仏教文学研究所（以下「研究所」といふ）を設置する。

(目的)

第二条 研究所は、建学の理念に基づき、仏教文学及び仏教と文学に関連する総合的研究を行い、もって文化の向上に資することを目的とする。

(事業)

第三条 前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

(一) 研究会及び講演会の開催

(二) 図書及び研究紀要の刊行

(三) 国内外の同種の研究団体及び関係する諸機関等との連携並びに学会等の開催

(四) その他研究所の目的を達成するために必要な事業

(職員)

第四条 研究所には次の職員を置く。

(一) 所長一人

(二) 所員若干人

二 所員は、本学の専任教員の中から学長がこれを委嘱し、その任期は二年とする。ただし、再任を妨げない。

(所長)

第五条 所長は、研究所を代表し、研究所の運営を統括する。

二 所長は、運営委員会の議を経て、本学専任教員の中から学長がこれを委嘱し、その任期は二年とする。ただし、再任を妨げない。

(幹事)

第六条 所長を補佐し、研究所の事務を掌るため、研究所に幹事を置く。

二 幹事は、運営委員会の議を経て、所員の中から学長がこ

れを委嘱し、その任期は二年とする。ただし、再任を妨げない。

(顧問)

第七条 研究所に必要な助言を与え、事業の円滑な運営をはかるため、若干人の顧問を置くことができる。

二 顧問には、退職した所長経験者を含めることができる。

三 顧問は、運営委員会の議を経て、所長が推薦し、学長がこれを委嘱する。

(運営委員会)

第八条 研究所には、運営に関わるすべての事項を審議し決定するために運営委員会を置く。

二 運営委員会は、所長及び所員をもって構成する。

(研究員)

第九条 研究所には、研究員を置くことができる。

二 研究員は、本研究所で行う研究活動に参加を希望する本学及び他大学の大学院生並びに国内外の研究者の中から、運営委員会の議を経て所長が推薦し、学長が委嘱する。

三 研究員の研究期間は一年とする。ただし、事情により研究期間の延長を認める。

(運営費)

第十条 研究所の運営費は、駒澤大学の年間予算、寄付金その他をもって充てる。

(規程の改廃)

第十一条 この規程の改廃は、運営委員会の議を経て、大学の承認を得なければならない。

附則

この規程は、平成八年四月一日から施行する。

附則

この規程は、平成十年四月一日から施行する。

附則

この規程は、平成二十一年四月一日から施行する。

令和三年度駒澤大学仏教文学研究所所員

所長	文学部教授	田中 徳定		所員兼幹事	総合教育研究部教授	鈴木 裕子
顧問	名誉教授	富士 昭雄			仏教学部准教授	大澤 邦由
"	名誉教授	高橋 文二			仏教学部准教授	徳野 崇行
"	名誉教授	林 達也		所員	文学部准教授	山口 弘江
"	名誉教授	坂口 博規		"	文学部講師	菅野 洋介
所員	仏教学部教授	飯塚 大展		"	文学部講師	三樹 陽介
"	仏教学部教授	金沢 篤		研究員	文学部講師	山口 智弘
"	仏教学部教授	藤井 淳		"	名誉教授	石井 公成
"	仏教学部教授	村松 哲文		"		阿部 昌子
"	文学部教授	小田 匡保				伊藤 達氏
所員兼幹事	文学部教授	近衛 典子				小笠原 広安
"	文学部教授	櫻井 陽子				
"	文学部教授	土井 光祐				
所員	文学部教授	瀧音 能之				
"	文学部教授	中村 淳				
"	文学部教授	モート, セーラ				

彙報

編集後記

一 令和二年度 研究発表会

二月二十六日（金）午前十時より

オンライン（Google Meet）

「小澤蘆庵と小林一茶の詩経題・易経題の詠作について」

文学部非常勤講師 伊藤 達氏 氏

「現代日本における葬送の多様化―エンディング産業展を中心に」

仏教学部准教授 徳野 崇行 氏

二 令和三年度 公開講演会

十月八日（金）午後三時より

オンライン（Google Meet）

「丹後の七仏薬師信仰と麻呂子親王」

国文学研究資料館名誉教授 小林 健二 氏

コロナ禍は二年目を迎え、一年の大半に緊急事態宣言が発出されるといふ、異常な状況が東京では続いておりましたが、秋以降は小室を得て、師走には多くの学生の姿をキャンパスで見かけることができるようになりました。

さて、大学や学会などでの学術報告は、オンラインによる実施が定着しつつあり、その形式は以前とはすっかり様変わりしております。本研究所においても、昨年度は実施できなかった公開講演会を、オンライン形式によって二年ぶりに開催することができました。小林健二先生をお招きした講演会の仔細は、本誌「丹後七仏薬師と麻呂子親王」をご覧ください。

このほか、本号には三名の先生方から論文が寄せられました。コロナ禍の中にあっても、真理の探究に向けた歩みが着実に進んでいることを知ることができ、たいへん心強い思いがいたしました。

変異株の出現により、コロナ禍の先行きはまだ不透明ではありますが、「ポストコロナ」「ウイズコロナ」の世界の在りようが各処で語られはじめています。今年度の本研究所の活動を、次の時代より良い学術活動に向けた第一歩にしたいものです。

（Y）